

丹波の開拓伝承の歴史地理学的研究

小畑 優璃

(佐々木ゼミ)

目次

はじめに

第1章

1-1 歴史地理学の分野

1-2 亀岡の地勢

1-3 亀岡の伝承

第2章

2-1 神話・伝説・昔話の特性

2-2 仮説

2-3 伝承の変化

第3章

3-1 亀岡の開拓伝承と三輪山

3-2 冬至の日の出

第4章

4-1 池尻廃寺と国府

4-2 丹波の古山陰道

4-3 国府と坊主塚古墳

結びにかえて

はじめに

山陰道の道の口とされていた丹波である京都府亀岡市は古来から重要視された地であった。そのため時の権力者たちは亀岡の地を自分の支配下に置くべく自分の重臣を派遣し続けた。四道将軍である丹波道主⁽¹⁾、大神氏である大神朝臣狛麻呂、織田信長に仕えた明智光秀、織田信長の四男で羽柴秀吉の養子であった羽柴秀勝、松平家などが例として挙げられる。

このような亀岡の地には伝承が多く残っており、祭りなどの形になり今も引き継がれている。10月23日、10月24日、10月25日の三日間にわたって祇園祭のように山鉦を巡行する亀岡祭⁽²⁾や、10月21日に行われる保津の火祭り⁽³⁾は丹波の起源伝承に基づいて行われている。本論文では歴史地理学

の方法論を用いて権力によって隠れてしまった丹波の歴史を解き明かしてみたい。

第1章

1-1 歴史地理学の分野

歴史地理学とは人文地理学の一領域に分類される⁽⁴⁾。その歴史地理学は現実世界 (real world)・空想世界 (imagined world)・抽象世界 (abstract world) の三つの領域に分類することができる。現実世界とは現代の現実世界であり、過去の現実世界である。資料上に出てきた地名や歴史的景観などの研究を通して過去の現実世界をできるかぎり復原し過去の地理を描き出す研究である。次に空想世界とは想像やイメージの世界であり、絵画や小説など物語の世界に描かれている世界である。この研究では過去において復原された現実世界の上に物語世界を入れることが課題である。そして抽象世界とは抽象的な世界である。例えば都の中心の次は生産地であり、労働者の生活場でありその外側にあるのは低所得者の生活場になっており、その外側を裕福層の地域が広がっているというこの国にでも起こりえる空間モデルのことである。江戸期の城下町であれば、中心に城があり、その周りに武家屋敷が存在し、その外側を商人の空間がしめ、また外側に寺町が形成されるという空間モデル構成である⁽⁵⁾。

このように三つの領域に分類することができる歴史地理学の研究法は、絵図の現代景観との対比や、野外調査 (field work) の資料にもとづく自然・人文両環境の復原、その他複雑な野外・室内両方の調査研究が必要となる。たとえば、土壌と作物との関係を復原したり、微地形の調査から旧河動の変遷や今は廃滅した集落、寺社仏閣や交通路、さらには過去の政治的境界を復原したりする。また近世の村絵図などを得るためには役所だけで

はなく、その地域の旧家や古老をたずね、聞き取り調査を行い、諸々の歴史地理的事象について、これを学術的資料として取捨選択する必要がある。それだけでなく、これらの資料を統計化し、地図化することが重要となる。また、古地図と現代の地図とを対比し、その間の景観の変遷、それを促した原因を考える。人類が自然環境に制約されることの多い歴史の地域を取り扱うため、多くの自然地理的な基礎訓練をも必要とする⁽⁶⁾。

1-2 亀岡の地勢

歴史地理学は1-1で述べてのように、さまざまなものを資料として用いる。

本研究では丹波について歴史地理学を用いて研究するため、丹波についての大まかな地勢と歴史を述べる。

京都府の中部、京都盆地の西に位置し、愛宕山系の西にある亀岡盆地の全域と、周辺山地を含み、中心街地は大堰川（保津川）の南岸、旧亀岡城下を中心に広がる。大堰川は北桑田郡、船井郡園部・八木方面から市の中央を南流し、支流を合わせつつ盆地南部で東流し、保津峡を抜けて京都市嵯峨・嵐山方面へ流れる。亀岡盆地は断層によって生じ、東部山麓は断層線が南北に通り、西部山麓の入り組んだ山麓と様相を異にする。盆地には条里遺構が多く認められ、大堰川およびその支流沿いの低地部は用水路により田を養い、周辺部にはため池が多く存在する。

では丹波の原始、中世、近世について細かく見ていきたい。

まず丹波の原始についてである。縄文時代の出土は皆無ではないが、遺跡として認められるものは現在のところ発見されていない。一方、弥生時代の遺跡は、河岸段丘の平坦部に分布する。遺構が確認されたものに御上人林遺跡（河原林町河原尻）の竪穴住居跡、馬場ヶ遺跡跡（大井町）の溝状遺構があり、いずれも後期の遺跡であるが、御上人林遺跡からは前期の土器も出土している。このほか余部遺跡（余部）・時塚遺跡（馬路町）は中期から後期の土器や石器が、松熊遺跡（東本梅町松熊）からは後期の土器が発見されている。ほかに石器がいくつか単独に出土している。

古墳は、前期と確認されている三ツ塚（篠町大子）

が小高い山の上であり、中期の古墳として前方後円墳の野条古墳（篠町野条）・保津車塚古墳（保津町案察使）・車塚古墳（千歳町出雲）、方墳の坊主塚古墳（馬路町池尻）・天神塚古墳（旭町）・滝の花塚古墳（篠町野条）・柘塚古墳（篠町野条）、円墳の浄法寺古墳（篠町浄法寺）・丸塚古墳（千代川町湯井）、特殊な双方中円墳と推定される狐塚古墳（余部町）などが盆地内の河岸段丘上に分布している。

『延喜式』神名帳には「出雲神社」「小川月神社」と「桑田神社」「三宅神社」「神野神社」「阿多古神社」「小幡神社」「走田神社」「松尾神社」「伊達神社」「大井神社」「与能神社」「多吉神社」「村山神社」「鍛山神社」「禊田野神社」の十六座が比定される⁽⁷⁾。

次に中世の丹波について述べる。平安時代末の亀岡市は源氏との関係が深く、矢代庄は源頼政が禁中の怪獣を退治した恩賞として得たと伝え、頼政が宇治で自害の後、遺骸を葬ったと伝える頼政塚がある。源義経は寿永3年、平家追討のため一ノ谷へ向かったとき、この地を通ったことが「平家物語」の文中からうかがえる。「吾妻鏡」文治2年3月26日条によれば、篠村庄が平家の手から義経に渡り、義経から源氏ゆかりの京都松尾の延朗に寄付されたことがわかる。

市域内に比定されるおもな荘園には篠村庄のほか桑田庄・矢田庄・賀舎庄・佐伯庄・保津庄などがある。これらも鎌倉時代には守護地頭の横暴が加わり衰微していったことが、出雲神社所蔵文書などからうかがわれる。

元弘3年足利尊氏が篠村八幡宮に反幕の兵を挙げ、六波羅に攻め入ったが、この前後に丹波・山陰の軍勢の往来が当地では激しかった様は、「太平記」にしばしば記載される。尊氏が勢力を持つようになってからは、仁木・山名・細川各氏が丹波守護職を継いだが、応仁の乱以来波多野氏が勢力を得、細川高国の命には従わず鎌倉以来土着した地侍を掌握し、丹波を支配するようになった。その後、戦国の世となり、織田信長の天下統一が進み、明智光秀によって丹波攻略が行われた。

そして近世だ。天正3年から始まった光秀の丹波攻めは、丹波勢の抵抗に難航したが、同7年策略により波多野氏を討ち取り、一応丹波を押えた。この間、亀岡盆地の周辺にも多くの城砦が構えら

れ、ことに余部岡山城に拠った福井因幡守兄弟の奮戦振りが丹陽軍記などに記されている。同6年より、7年にかけて光秀は弟左馬介縄張りさせ、荒塚の砦を広げて亀山城を築かせた。同10年光秀は本能寺に信長を攻めた後、秀吉に討たれ、亀山城は秀吉が預かり代官によって守らせた。

物資の京都方面への搬出は山陰道を利用し、木材は保津川を筏で運んだ。角倉了以によって保津川に舟運の便が開かれてからは、舟で米・薪炭が運ばれるようになった。

保津川の峡口部は狭く、増水時には水はけが悪く、保津川流域の低地部はしばしば冠水した。亀山城主岡部長盛の時、保津川の水勢に田地在削り取られるのを防ぐため、雑水川が保津川へ流れ込むあたりと、年谷川が流れ込む下のあたりに二つ石堤を築いた。

1-3 亀岡の伝承

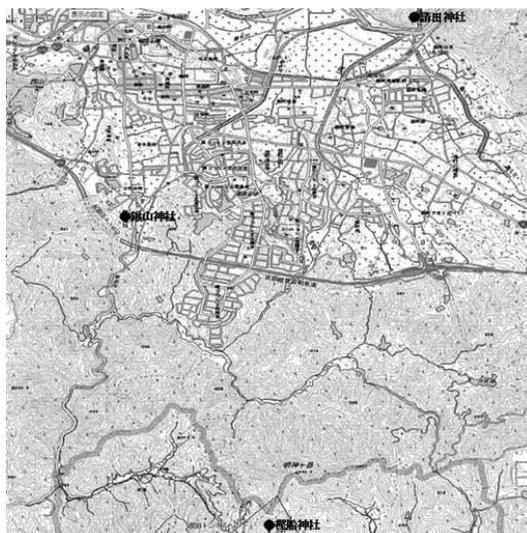
山陰道の道の口で都に深いかかわりを持っていた丹波である亀岡市には以下のような伝承が伝わっている。

(I) 鍬山神社 + 請田神社 + 樫船神社

亀岡は大昔湖で、亀山城址の辺りは島であった。大国主命が樫田村字田能に祀ってある樫船神社から船を借りてこの湖を切り開かれた際、湖中に大蛇が棲んでいたのが、命はそれをお平らげになって無事に亀岡の地を開拓されたと云われている。亀岡町の氏神である鍬山神社の例祭に出る山車の一つが、舟を型どったもので、而もその舟の下部に水が飛び散って居る様が描いてあって、その水玉が青色と赤色とに塗ってあるのは、如上の伝説に根拠を置くもので、赤色は即ち大蛇の血を表すものである。(田中勝雄『旅と伝説』第十年第十号、三元社、1937、43頁より引用)

(II) 鍬山神社 + 請田神社 + 持籠神社 (籠持神社)

丹波国の湖の水を全部何処かへ流してうと、その跡に平地ができて、五穀が実るので、請田神社、鍬山神社、持籠神社の三柱の神様が、保津の谷川へその水を流す方法に就いて種々相談せられた。その結果、仕事の費用は全部請田



【地図1】 伝承に登場する鍬山神社、請田神社、樫船神社の分布

神が引き請けられ、その代わりに鍬山神は鍬で、持籠神は持籠で、それぞれ仕事をされたと伝えられている。(田中勝雄『旅と伝説』第九年第十二号、三元社、1936、45～46頁より引用)

この(I)と(II)の伝承はともに「旅と伝説」の本に載せられている伝承である。また、亀岡市の地域の人々にも広く伝わっている。これらの伝承を要約すると、亀岡は大昔湖で、その湖の水を三人の神様によって排水されたという、亀岡盆地の起源を説明する「神話」である。

神話とは特定の社会において、人々によって真実として受け止められている話である。話の中に語られる出来事によって現実の様々な事象の存在の根拠が示され、基礎づけられる⁽⁸⁾。

これは神々の話だけではない。例として健康診断がある。健康診断を受けていると病気にならず、健康に過ごすことができると信じている。これが私たちにとっては真実であると受け止められている。だが、もしかすると何年も先の未来では健康診断を受けることで健康に過ごせるというのは間違っている話になっているかもしれない。このように神話は気が付いていないだけで、身近に存在している可能性が十分にある。

さて、上記の(I)と(II)の伝承は両方とも「亀岡が昔湖であったこと」と「三人の神様が亀岡の

開拓に携わっていること」を述べている。一見この二つの伝承は同じ伝承に見えるが、異なる点がある。(Ⅰ)の伝承は「鋹山神社」、「請田神社」、「檜船神社」の神が開拓に携わっているが、(Ⅱ)の伝承は「鋹山神社」、「請田神社」、「持籠神社」の神が開拓に携わっている。ここから(Ⅰ)の伝承と(Ⅱ)の伝承では登場する神が異なることがわかる。また、様々な伝承を見て、聞き取り調査も行ってきたが、「檜船神社」と「持籠神社」が同時に記載されている資料は存在しない。

ここから、なぜ檜船神社と持籠神社が同時に記載されている資料が無いのかと疑問点が浮かび上がる。また、檜船神社は現在の高槻市に存在するが持籠神社は現存しない。ここからも、なぜ存在しない神社が語られているのかと疑問が残る。

亀岡には、伝承に登場する神社以外の多くの神社や祭りでも開拓伝承が語られている。このことから、これらの開拓伝承は亀岡にとって重要な伝承であることが分かるが、なぜ持籠神社は現存しないのか。

第2章

2-1 神話・伝説・昔話の特性

ここでは神話、伝説、昔話の特性について、佐々木高弘の『民話の地理学』⁽⁹⁾を示す。

まず、神話は、「天地創造」などで知られるように、この世のはじめにおける出来事、宇宙や人間や文化の起源などについて伝承する。多くの場合、話の中心を神々が占める。また神話が、当核社会において有効な場合、その社会に属する人々の行動をあらゆる点から呪縛する。そのようなとき、人々は、その神話を疑うことができない。また、このような神話は権力と結びつくことが多い。その語る時間は原古で不明であるが、出来事の生じた場所は実在する場合が多い。登場するのは神々であ

るが、歴史上実在したとされる権力者とともに語られることもある⁽¹⁰⁾。

次に伝説は、本当にあったと言い伝えられてきた伝承で、その語る時代は神話より新しい。したがって、伝承の生きている社会では、人々はその内容を真実だと主張する。しかし、その真実は神話のように絶対ではなく、人々が「本当にあったんだ」と懸命に主張しなければならないだけで、語る人々にとっても、半ば信じられない話であったと考えられる。それでも、これら真実を主張する必要性から、語られる時や場所、また人物が特定され、証拠として提示される。伝説は当事者にとって、実際過去にあった出来事、つまり歴史の役割を果たすことになる⁽¹¹⁾。

そして昔話は、時代も、場所も、人物も架空となる。したがって語り手も聴き手も、フィクションとしてこの話を聴く。多くの場合、彼らにとってそれらは娯楽であり、また教訓であった。

同書で佐々木は次のように述べている。「三輪山の神婚神話は、奈良盆地南南東に侵入してきた征服者崇神が、大和王権樹立のために利用した。その過程で、大物王神の信仰を広め、人々を教化した。その主な内容はおそらく、彼自身が大物主神の御子である、だからこの地の主なのだ、というものであったろう。教化され支配を受けた人々は、その話を疑うことすらできなかった。神話にはそのような、人々の行動や知覚を規定する働きがある。このような働きを持つ神話を使って、地域を支配する王が各地に現れた。崇神の成功は、大物主信仰を広めただけでなく、地域をどうやって支配するのか、についての方法をも広めた。そうやって新たな勢力が特定の地域を制する⁽¹²⁾。」

つまり権力者は神話を利用し、人々を支配した。そしてこの方法は各地に広められたのだ。また次のようにも述べている。

「神話は神々の話で疑ってはならないが、その神

	話の内容	当事者の態度	機能	時間	場所	人物
神話	神々が中心	疑ってはならない	権力	原古	特定	特定・神
伝説	妖怪が中心	真実性を主張	歴史	特定	特定	特定
昔話	人間が中心	フィクションとして扱う	娯楽・教訓	不特定	不特定	不特定

表1 神話・伝説・昔話の特性 (佐々木高弘『民話の地理学』、2014、217～218頁より)

丹波の開拓伝承の歴史地理学的研究

を奉じている支配者が政権の座からすべり落ち、「政権交代」が行われたとき、同時に神話も零落する。つまり神が神ではなくなる。しかしその霊力はまだ生きている。その霊力はかつての支配者と共に次第に負の意味を帯び、人々に引き継がれる。それが過去の事実だとして伝説となり、神は鬼などの妖怪へと転じる。さらに時代を経るとそれぞれ霊力を失い、フィクションとして語られ、人々の関心は神や妖怪よりも、それらに対処する主人公の行為や心理に移る。それが昔話である⁽¹³⁾。」

2-2 仮説

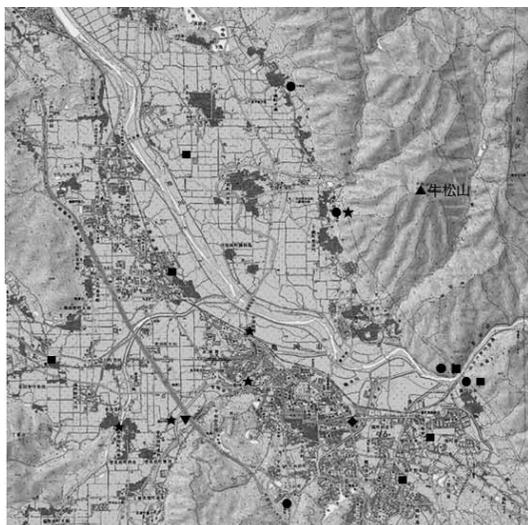
持籠神社が現存しない仮説として、政権交代があげられる。開拓神話に関わる神社は亀岡に多く存在しており、それらは大きく分けて「出雲系」

の神社、「松尾系」の神社、に分けることができる。ここから、持籠神社が「出雲系」「松尾系」「そのほかの系統」「今は存在しない系統」に分けることができるはずである。政権交代が行われ、新しい勢力に倒された今は存在しない系統があると考えることができる。また、出雲系である檜船神社と持籠神社は同時に記載されている伝承がないため、持籠神社は「出雲系」と敵対関係にあったのではないかと仮説を立てることができる。

表2は亀岡の式内社についてまとめた表である。上田正昭「古代村落の成立」『篠村史』で指摘されているが、これらの神社は主に松尾神系・出雲神系・皇室神系・賀茂神系などに区別できる。

名称	祭神	系列	所在
出雲神社 ⁽¹⁴⁾	大国主・美穂津姫	出雲	千歳町出雲
○桑田神社 ⁽¹⁵⁾	①大山咋・大国主 ②市杵島姫・大山咋	①出雲・松尾 ②松尾	①篠町山本 ②篠町馬堀
三宅神社 ⁽¹⁶⁾	宇迦之御魂	稲荷	三宅町
小川月神社	月讀	松尾	馬路町
三県神社	不明	不明	不明
神野神社	伊賀古夜日売	賀茂	宮前町宮川
山国神社	大己貴または大山咋	出雲または賀茂	北桑田郡京北町
阿多古神社	火之夜藝速男・伊邪那美・大国主	皇室・出雲	千歳町国分
小幡神社 ⁽¹⁷⁾	開花天皇・彦座王・小倭王	皇室	曾我部町穴太
走田神社	彦火火出見・彦波瀲武鸕鷀草葺不合・豊玉姫	皇室・賀茂	余部町
○松尾神社	大山咋・市杵島姫	松尾	旭町今峠
伊達神社	①五十猛 ②五十猛	①皇室 ②皇室	安町 宇津根町
○大井神社 ⁽¹⁸⁾	木保・月讀・市杵島姫	松尾	大井町並河
石穂神社	不明	不明	不明
與野神社	事代主・建御名方・天照・天兒屋根	出雲・皇室	曾我部町寺蛇谷
多吉神社	高御産巢日・神産巢日	皇室	西別院町柚原
村山神社	大山祇・木花開耶姫	松尾	篠町森
○欽山神社 ⁽¹⁹⁾	大己貴	出雲	上矢田町
蕨田野神社 ⁽²⁰⁾	保食・大山祇・野稚	松尾	蕨田野町佐伯
石穂神社	大己貴	不明	不明
與野神社	保食・大山祇・野稚	出雲・皇室	曾我部町寺蛇谷

表2 式内社の一覧と系列（○印は開拓伝承を語る神社）



【地図2】 式内社の地図化（神野神社、山国神社、不明な神社、京北など地図に入りきらなかった神社は含まれていない。また、桑田神社は請田神社と呼ばれていたこともあるため記入している。）
 ●出雲系 ■松尾系 ★皇室系 ▼賀茂系 ◆稻荷系
 ●■出雲・松尾 ●★出雲・皇室 ★▼皇室・賀茂系

2-3 伝承の変化

2-1でも述べたが、神話は、権力者が自分を「神」として語ることによって、その地を支配するための一つの手段である。

だがその神話は変化する。神話が伝説や昔話に変化するという事はその土地の権力者が権力を失い、新しい権力者が入ってきたことを表す。つまり政権交代を意味する。

盛者必衰という言葉があるくらいだ。権力者はいつか必ず滅びる。つまり神として神話を語っていた権力者は神ではなくなる。神々が中心だった「神話」の神が零落すると、それは妖怪が中心の「伝説」になり、その妖怪を倒した話が昔話として、娯楽・教訓として語られるようになるのだ。

亀岡市の開拓に携わる伝承で「政権交代」を示している伝承がある。

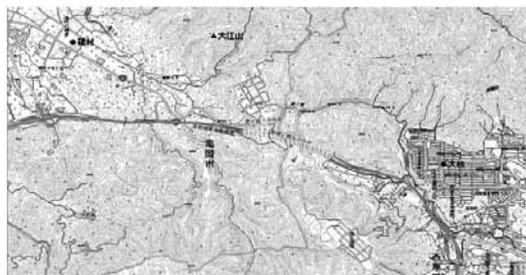
(Ⅲ)「湖水の出来た話」

東丹波の最東端、篠村の東はいわゆる大江山であるが、昔この山の西麓に大池があって大蛇が住んでいた。そして往来の人を取って喰ったそうで、ある時夫婦連れの武士が通りかかった

ので、早速に蛇が出て女の方を呑んでしまった。

これを見た武士はたちまち池中に飛び込んで、蛇の腹中に這入りて刀をもって大蛇の五臓六腑を切りまくった。さすがの大蛇でもこれは参って血を吐いて死んでしまった。その流れ出る血潮と共に武士は、押し流され、危ない命を捨てたと謂う。

そのために池の水に溢れて大江のごとく、見る見る湖と化して赤い波が打ち寄せ始めた。故に国を丹波と名付け、里を大枝（大江）と称し、この武士の押し出された処が生野である。（垣田五百次、坪井忠彦編『口丹波口碑集』1925年、郷土研究社、5頁より引用）



【地図3】 伝承に登場する地名の地図化

1-3の(Ⅰ)の伝承と上記(Ⅲ)の伝承を比較する。この二つの伝承はよく似ており、ともに「丹波」の名前の由来を示している。昔湖にいた大蛇を切り殺し、その地が湖になり、赤い波が打ち寄せ始めた。この「丹の波」が「丹波」の名前の由来である。だが、この伝承は単に「丹波」の名前の由来を示しているものであろうか。

大蛇を切った(Ⅰ)の伝承の大国主命と(Ⅲ)の伝承の武士は何を表しているのだろうか。この伝承の観点を変えると、人々に危害を加えていた大蛇を倒してくれたおかげで亀岡の人々は安心して暮らすことができるようになった、という話になる。

この場合、大蛇を倒した者は亀岡盆地に入ってきた「新しい勢力」と受け取ることもできる。そう考える場合、亀岡盆地を支配していた「大蛇」は「新しい勢力」に倒され、亀岡盆地は「新しい勢力」によって統治される、政権交代を示していると考えることができる。

亀岡盆地には「倒された勢力」があった可能性がある。このことから、亀岡では政権交代を神話を利用して表していることがわかる。

これらのことからこの「湖水のできた話」は政権交代を意味し、この土地の支配者は自分だと主張するための伝承であると考えることができる。また、(I)の伝承と(Ⅲ)の伝承を比較すると、(I)の伝承は「大国主命」が湖中の大蛇を倒しているが、一方で(Ⅲ)の伝承では「武士」が大蛇を倒している。ここからこの伝承は武士が活躍する時代に書き換えられていることがわかる。

いずれにせよ、亀岡では政権交代が行われ、伝承は書き換えられていることがわかる。その過程で持籠神社が地域から、伝承から消えてしまったと考えることが出来る。では古代の亀岡の権力者はどのような勢力だったのか、またその勢力の中心地はどこであったのか、これらを以下の章で考えていきたい。

第3章

3-1 亀岡の開拓伝承と三輪山

奈良県桜井市にある三輪山は大物主神が最初に降臨した山であることは有名な話だ。その三輪山周辺の空間構想は冬至の際の日の出と深い関わりがある。古代の開拓神話の中で「誰が語っているか」を知るには冬至の向きが重要となる。亀岡市の北東に位置する牛松山にも大物主神が祀られていた伝承が残っている。そこで古代の古い地域支配のあり方は亀岡でも成立するのかを確かめてみる。

3-2 冬至の日の出

ここでは古代方位信仰の先行研究として山田彦の「古代の方位信仰と地域計画」を示す。

山田は「古代の方位信仰と地域計画」で、自然を各時代の人間が如何に理解していたかを知り、それを活用して神社の位置などを考えている。

自然を各時代の人間がどのように理解していたかということは、歴史地理学にとっては重要な研究方法の一つとなる。たとえば、古代日本の場合、労働の効用と気温の安定（水・気温など）と土地肥沃による生産の豊穡という三者が経済的価値体系となるから、古代人は宗教的信仰対象としての

自然に生産豊穡を祈願する。そこで、具体的には自然災禍を回避するために、自然を対象とした宗教的信仰が発生することが多い。

自然災禍の回避と平穏息災を祈願するとすれば、宇宙・自然の形而上的摂理条件に適合させ、斉整させるように現世構造を配列し、また地上においてはそれを適合するように配置するという象徴性が発生する。すなわち、そのような知覚的全体の中では、「よい形」で簡潔性を保つような斉整的法則性が現れるようになる。したがって地域的象徴も極めて斉整的な様相を呈示するものが多い。しかも簡潔な形ほど、単純性・規則性・対称性・連続性の要素によって特徴づけられている。これらの現象を媒介として人間は神に接近しようとする。

そこで次にそれらの知覚認識や心像が地域の社会の生活の中にどのように影響していたかを考える。

日本で精神生活の基底構造の中を考えなければならぬのは、国の基底文化が水田によって培われてきたため、水について考える必要がある。

水は一般に人間生活には不可欠であり、水田耕作では灌漑用の水の確保が重要となる。そこで日本は、農業用水としての「水の神」と洪水を防除するための「水の神」が同時に信仰されている。水田は沖積低地が適地であるが、洪水は低地に常習発生する。したがって、農業神としての「水の神」と洪水からの被害を回避するための守護神としての「水の神」が同時に祭祀される場合が多い。また、水源は山であり、山が荒れて出水し洪水を発生することも多いので「水の神」は「山の神」としても信仰される。したがって農業生産の神として信仰対象とされている山を基盤として、祭祀空間が構成され、その空間が生活地域となっている。

大和の三輪山の場合は典型的であり、農耕生産神として絶大な信仰をあつめ、その起源は古い。山岳と気象現象とは関係が深いので「山の神」信仰と太陽や自然崇拜とが結合している場合も多い。山自体が信仰の対象となり「御神体山」として今なお信仰を集めている例は各地にある。

また、山岳と気象現象とは関係が深いため、「山の神」信仰と太陽や自然崇拜とが結合している場合も多い。大和の場合、三輪山を中心にして太陽崇拜のカレンダー構成のような地域的空間構成



【図1】 冬至の日の出の際に池尻遺跡から見た牛松山

を想定しているように推論しうる。三輪山が信仰の対象となったのは、崇神天皇が疫霊追放のため、三輪山の大神主神に祭祀を行って、初めて国土が泰平になったといわれた時から端を発す。また、これをもって大和朝廷の国土建設の端緒が見いだされる。崇神王朝の拠点、三輪山付近一帯であったといわれる。

三輪山を中心とした周辺諸施設の配置をみると、奈良盆地中央部の寺川左岸「八尾」に、鏡作坐天照御魂神社が鎮座するが、この位置から三輪山山頂に昇る冬至旭日を拝冬でき、一方、二上山山頂近くに入るに入る冬至夕日を拝むことが出来る。要するに三輪山周辺は、太陽運行と関連して方位とか立地を選定しているように推測される。これが古代大和の地域計画の一部にもなっているように推論されるのである。

以上のことから冬至の日の出は古代地域の空間構想と非常に関わりがあることがわかる。そこで地図ソフトであるカシミール3Dを用いて、牛松山の山頂から、冬至の際の日の出の光の通り道を調べた。その結果、亀岡市馬路町坊主塚古墳の真下にある「池尻遺跡」を通ることが分かった。

第4章

4-1 池尻廃寺と国府

丹波の国府⁽²¹⁾はどこに置かれていたかははっきりとはまだ分かっていない。さまざまな説があるが、現在一番有力な候補は八木町屋賀と亀岡市馬路町池尻にまたがる遺跡である池尻遺跡だ。池尻

廃寺はこの池尻遺跡に含まれる。

1991年に行われた発掘調査⁽²²⁾ではこの地から南北方向の溝が見つかり、その中から模様のある古代軒平瓦や普通の平瓦と丸瓦が出土した。この平瓦には奈良時代の特徴である縄目の叩きのあるものと、白鳳期の特徴である格子目叩きのあるものがあり、軒平瓦には同じく白鳳期の特徴を示す重弧文があった。古代の瓦葺の建物は寺院か役所の建物しか考えられない。この遺跡の北西背後に位置する屋賀（八木町）には「国府」の小字名が残ることから、この池尻遺跡に国府があったと考えることができる。また、この池尻遺跡は北を向いており、柵と堀が発見された。役所関係の建物は北を向いていることが多く、これらの空間は開かれたものではなかった。これらのことから池尻遺跡に国府が置かれていた可能性が高いのである。

そして同年の調査で、東方200メートルの位置に奈良時代の須恵器の長首壺が多数見つかった。この壺は漆が蒸発しにくく、液体がこぼれにくい長首の容器であることから、漆用の容器であったことが知られている。『延喜式』には、丹波、丹後など15国から都へ漆を献上することが定められているため、この容器は漆を運搬するために作られていたと考えられる。これらのことから池尻遺跡付近に奈良時代の国府付属の長首壺工房があったと推定することができる。

4-2 丹波の古山陰道

国府は主に官道にそって建てられた。そこで丹波の古山陰道について足利健亮「古山陰道の変遷」

『亀岡市史』を用いて述べる。丹波は山陰道の口に位置する国だ。その丹波の中で道の口を占めたのが桑田郡だった。都と山陰の諸国を結ぶ公用の馬が走る大道は、畿内と丹波の境界をなしていた老いの坂を越えてまず亀岡に入ってきた。その老いの坂を通過して亀岡市域に入った古代の山陰道の道筋は奈良時代のもので平安時代のもので異なっていたと考えられている。

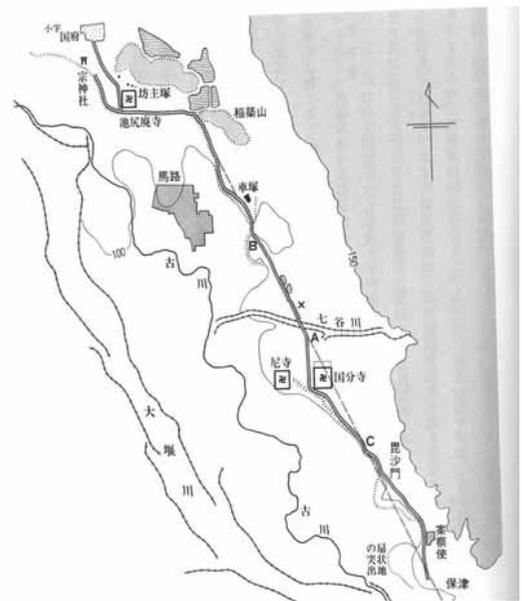
奈良時代までの道は、馬堀付近で大堰川を北へ渡り、保津から北北西を目指して池尻付近に至るルートをとった。これに対して平安時代の道筋は、大堰川を渡ることなく、旧亀岡市街北西端から西を指し、湯の花を通過して天引峠へ向かうものだった。

ここでは奈良時代までの道筋に注目する。奈良時代までの道筋を考える際のキーポイントは、国分寺の遺跡だ。国分寺とは聖武天皇の詔に則して建設された国営の寺院である。丹波国分寺は七谷川が形成した高燥な扇状地面で、しかも亀岡盆地の中央といってよい位置である。

《A-B》

明治22年測量の地形図等（地図4）によると、国分寺域北背後から北北西を指して少なくとも1キロメートル直進する道が認められている。また、×印地点の小字を「大道」といい、B付近に三日市という定期市日を名とする小集落が立地する。この三日市には、古代の瓦片・土師器片が多数散布する地点がある。このことから古代寺院の存在したことが推定される。その上、三日市は「元馬路」とも呼ばれる。現在ある馬路は開発に伴って移転したという伝承が残っている。これは駅路（うまやじ）に通じる可能性がある。駅路とは、沿道に馬屋を設け、そこに駅馬・伝馬を常置し、官人が駅馬を乗り継いで中央地方間の文書や情報の伝達、また地方から帰任する役人が伝馬を利用された国家的な大道を意味する。

駅馬・伝馬の設置は大化の改新の詔に見え⁽²³⁾、大宝令では、山陰道上の各駅が、原則として5匹ずつの駅馬を備え、伝馬は都ごとに各5匹を備えるべきことが規定された。また、『日本書紀』に「処々の大道を修治る」と記録されており、丹波を通る山陰道も7世紀後半には整備されていた可能性が



【地図4】奈良時代の古山陰道（亀岡市史編さん委員会『新修亀岡市史 第1巻』、亀岡市、1996、435頁より）

高い。

《A-Bの延長線 案察使》

直線A-B（地図4）を南に延長すると保津の「案察使」という集落がある。『続日本紀』によると養老3年、一人の国守が3～4国を管掌して、「若し非違及び百姓を侵略することあれば、則ち按察使親しく自ら巡省して、状を量って黜陟する」という役目を与えられた阿察使の制が発足された。この時、丹波の国守であった小野朝臣馬養は自国の他に丹後・但馬・因幡の三国を管掌する阿察使に任じられた。これは「案察使」という集落と関係があると考えられることができる。

いずれにせよ、A-B古道とその北北西-南南東延長線は国分寺と密接な関係を有し、国分寺の西側面から正面を通過した。従来古代官道の推定がなされているところでは、ほとんどの場合それが国分寺の前面ないし側面を通過していたことが判明しているため、奈良時代及びそれ以前の山陰道をこの道と考えるための最大の根拠となる。

そしてA-B古道とその南北に連なる古道の実態を見ると、みごとに段丘崖上の縁に沿って通っている様子が判明する。これは大堰川の氾濫によっ

でも破壊されることのない段丘崖上縁にこだわっている。また、C点から国分寺前の道は、おそらく国分寺建設に伴ってC-B直線を離れるようになった当時の新道であると考えられる。

4-3 池尻廃寺と坊主塚古墳の関係

話を池尻廃寺に戻すが、池尻遺跡にある池尻廃寺のすぐ真上に坊主塚古墳がある。お寺や役所など、建物を設計する場合、設計の起点となるものがある。平安京を設計するときには船岡山を基準にしたことが例だ。池尻廃寺は坊主塚古墳を基準にしていたと思われる。このように池尻廃寺と坊主塚古墳は関係があることがわかる。

以下の表は坊主塚古墳の特徴をまとめたものである。

坊主塚古墳	
出土品	[副葬品] 仿整神獣鏡、三角板鋳留短甲、横刃板鋳留衝角付冑、短剣、鉄剣、鉄鏃 [それ以外] 円筒埴輪（馬、鳥など）、須恵器片
外部構造の特徴	方墳。埴輪・周濠が存在する。また造出しが取りつく可能性もある。 →方墳であることを除けば「畿内大王墓」の外部構造そのものである。
被葬者	○武器・武具の比重が高い（古墳時代中期の特徴） →5世紀後半に盆地全域を掌握した首長の墓であった可能性が高い。 ○畿内政権の武装集団の一翼を担った人物であると想定される。
その他	北西に約100mに天神塚古墳（方墳）がある。 →二世代約半世紀にわたって、その地域を治めた首長の存在を物語る。

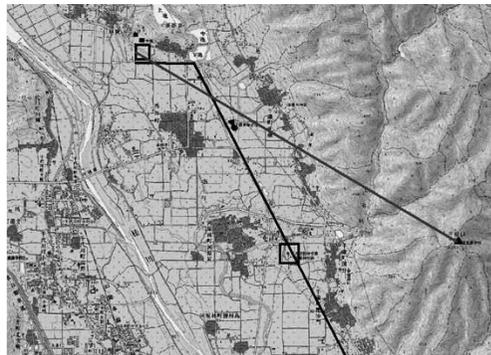
表3 坊主塚古墳

表からわかるが、坊主塚古墳の出土品は武器・武具の比率が高く、権力者の墓であることがわかる。

これらのことから、池尻遺跡が国府であるならば、丹波国府には坊主塚古墳に関係のある人物がいて、なおかつ坊主塚古墳に眠っている人物は丹波で強い権力を持った豪族であり、亀岡を支配していたと考えることができる。また、池尻廃寺に冬至の際の日の出の光がとおっていることから、この権力者は三輪山と同じ土地プランとして利用したことがわかる。

また『続日本紀』によると「三月十三日、……従五位上大神朝臣狛麻呂を丹波守に……任じた」と書かれている。

大神氏は氏祖を大物主神の末裔である大田田根子に持ち、奈良県の桜井市に鎮座する大神神社を信仰した。その大神神社は三輪山を神体山とする本殿を持たない神社である。この大物主の末裔である大神氏の大神朝臣狛麻呂が新都造営の詔が下された和銅元年に丹波守として任命されている。



【地図5】 冬至の日の光と古道（色の濃い線が古道を表し、牛松山か伸びている線が冬至の日の光を表している。）

結びにかえて

三輪系の人物が丹波の権力者であった時代に、亀岡の開拓伝承で謎に包まれている「持籠神社」が存在したのか。まだ存在していなかったのか。あるいはすでに別の権力によって消えていたのか。その結論は本研究で見つけることができなかった。また、何層にも積み重ねられた歴史の中で権力者はなんども入れ替わる。それと同時に伝承も変化する。今回の研究はその中の一つの変化に触れたにすぎない。

だが、丹波である亀岡の地も三輪山と同じ土地プランを利用していたことは大きな発見である。これは歴史、文化、自然環境、などどれかに偏って研究していたら発見することができなかった。これは歴史地理学という様々な視点から研究することによって導くことができた答えであり、今後この開拓伝承を研究する上で重要となる研究方法だ。

【注】

丹波の開拓伝承の歴史地理学的研究

- (1) 松井拳堂『丹波人物志』臨川書店, 1987。「四道将軍に命じられ丹波を平定して教化を布かれ」とある。
- (2) 亀岡祭りは鍬山神社の祭礼で、現在はなくなってしまっているが亀岡の開拓伝承に登場する檣船も巡行していた。
- (3) 聞き取り調査によると保津の火祭りでは火を焚く説は二つあることが分かった。一つは昔丹波の国が湖だった時、保津峡の入り口には流木やら大きな岩が詰まっており、湖の水を流して肥沃な土地にする為に、この岩や流木を火で焼いた。それに感謝の気持ちと五穀豊穡を込めて火を焚いているという説。もう一つは角倉了以が保津川を切り崩したときに、岩を焼いては水をかけて、焼いては水をかけて、岩がもろくなったところを、鍬でけずった。そのおかげで、船が通れるようになり、丹波の生産能力が一気に高まった。その感謝の気持ちを火を焚く事で、神様と同じ熱い思いをして感謝の気持ちを表しているという説がある。
- (4) 人文地理学は次の5つのテーマに分かれている。①文化地域 (culture region) a 形式文化地域 b 機能文化地域 c 知覚文化地域。②文化拡散 (cultural diffusion) a 伝染的拡大拡散 b 階層的拡散 c 移転拡散。③文化生態学 (cultural ecology) a 環境決定論 b 可能論 c 環境知覚研究。④文化的相互作用 (cultural interaction) 社会科学としての地理学、人文主義地理学。⑤文化景観 (cultural landscape) 文化集団が地表面に居住して創り上げた可視的な物質的景観、視覚的な文化の記録。解釈学的な文化景観論である「景観をテキストとして読む」、象徴論的な文化景観研究。この5つのテーマのなかで、本研究のテーマとなる歴史地理学の環境知覚研究は文化生態学 (cultural ecology) に含まれる。環境知覚研究とは自然に対する人間の知覚に焦点をあてたものだ。それぞれの文化集団は、自然環境に対するメンタル・イメージを持っている。その主な考え方は「なぜある文化集団が、その自然環境において、そのようなことをしたのか」という問いに、私たちは環境がどのよ
- うなものであったかだけでなく、文化の構成員が、その環境をどのように知覚していたかを知る必要がある (Jordan, T.G. Domosh, Mand L. Rowntree, ed. The Human Mosaic, Longman, 1997, pp3-35.)。また、環境知覚研究の特に発展した分野として、異なる時代の文化集団の地理的行動の理解である「歴史地理学」、異なる地域の文化集団の地理的行動の理解である「文化地理学」、そして旧居住地の環境と新居住地の環境に対する移民の環境知覚である「移民研究」、災害多発地の住民の災害知覚である「災害研究」がある。
- (5) 有蘭正一郎他編『歴史地理調査ハンドブック』古今書院, 2001, 4～6頁。
- (6) 藤岡謙二郎他『歴史の空間構造』大明堂, 1978, 9～12頁。
- (7) 皇典講究所『延喜式』上巻、大岡山書店, 1929, 363～364頁
- (8) 石川栄吉他『文化人類学事典』弘文堂, 1987, 392頁
- (9) 佐々木高弘『民話の地理学』古今書院, 2014, 216～218頁
- (10) 前掲注9, 216～217頁。
- (11) 前掲注9, 217頁。
- (12) 前掲注9, 173～174頁。
- (13) 前掲注9, 175頁。
- (14) 本社は別名を一の宮、大明神、総社、千年宮、出雲神社ともいい、「元出雲」とも俗称される。社殿の背後にある御影山は、古くから神体山としてあがめられる。
- (15) 太古丹波の国は一大湖水で、降雨来れば逆流して洪水となり濁浪が田畑を洗い、作物を流したため、住民の生活は困窮を極めた。大山咋命は大国主命を従えてこの地に来られ、土民を督励し、相協力して岩を砕き、石を割り、土を盛って、山本浮田の峡を切り開き、山城葛野へ水を流し陸田に干拓し、後、大山咋命は鋤を取り、大国主命は鍬を取って、土地の住民とともに農業に励んだ。また、明治六年まで請田神社と名乗っていた。
- (16) 屯倉が三宅に変化したものとされている。
- (17) 和銅元年に、丹波国守大神朝臣伯麻呂が社殿を建立したといわれている。

- (18) 大井神社は丹波が開拓され、水が流された後にも大井の水は乾かなかった。その大井の水に万が一のことがあれば平地一帯は瞬時にして前のように湖水となるのを心配し、木俣命を祀った。
- (19) 太古の昔、丹の湖であった亀岡盆地の南端の黒柄山に八柱の出雲の神々が降臨され、一葉の舟にのり、浮田の峡、現在の請田の峡を切り開き、湖水を干拓して肥沃な農地にした。その時に使った鍬が山のように高く積み上げられたことから鍬山と呼ばれた。
- (20) 丹波国守大神朝臣巨麻呂が五穀守護神として社殿を建立したといわれている。
- (21) 律令制化の諸国の役所、またその所在地。役所としての国府は、多くの場合コの字型の建物配置をとる政庁を中心に、さまざまな官衙・倉庫・工房、国司の居館などから構成され、国内の比較的都に近い場所の立地が多く、官道にそって建設された。このような国府は現在までの発掘調査では八世紀初頭に成立し、十世紀には廃絶。また平安時代における国府の移転が想定される国もかなりある。
- (22) 岡崎研一「池尻遺跡第12次の発掘調査」2006、『京都府埋蔵文化財情報』第100号、京都府埋蔵文化財調査研究センター、2006、1～8頁。
- (23) 「初めて京師を修め、畿内の国司、郡司、関塞、斥候、防人、駈馬、伝馬を置く」（日本書紀）。
- 『人間文化学部学生論文集』第8集、京都学園大学人間文化学会学生論文集編集委員会、2010。
- 下中邦彦『日本歴史地名大系』第26巻、平凡社、1981。
- 山田安彦『古代の方位信仰と地域計画』古今書院、1986。
- 藤岡謙二郎『地形図に歴史を読む』第1集、大明堂、1969。
- 上田正昭『民俗祭事の伝統－丹波・亀岡のまつり－』角川書店、1992。
- 八木町史編集委員会編『図説丹波八木の歴史』南丹市、2012。
- 亀岡市史編さん委員会『新修亀岡市史』第1巻、亀岡市、1996。
- 亀岡市史編さん委員会『新修亀岡市史』第2巻、亀岡市、1996。
- 上田正昭『篠村史』篠村史編纂委員会、1961。

【参考文献】

※ここに記すものは、この論文を作成するにあたり影響を受けた書物・参考にした書物である。基本的に注に記したものについては表記しない。

- 佐々木高弘『民話の地理学』古今書院、2003。
- 佐々木高弘『怪異の風景学』古今書院、2009。
- 佐々木高弘『神話の風景』古今書院、2014。
- 福地正温『亀岡風土記』亀岡市民新聞社、1993。
- 福地正温『ふるさと亀岡をつづる』大学堂書店、1982。
- 新井茉莉安「亀岡における神話空間の変容」、2010、